

豊かな看護

北海道
札幌市

グループホーム(認知症対応型老人共同生活援助施設)
有限会社ライフアート **福寿荘Ⅲ**

認知症の人たちが望む“自分らしく”を支えてきた札幌市のグループホーム福寿荘。介護保険制度が始まった2000年に福寿荘Ⅰをオープン。03年に福寿荘Ⅱを、06年には福寿荘Ⅲの開所とあわせてデイサービスを開始している。

認知症の人にはできる力を秘めた人

創業者の武田純子総施設長は「認知症の人にはできる力を秘めた人」との信念を持ち、認知症の人へのケアを行ってきた。一人一人の秘めた力や思いを引き出すには、認知症に関する知識だけでなく、感性が必要だという。

現在、福寿荘Ⅲに入居中の90代男性のOさん。入居時は下肢に力が入らず車いすを使用していたが、徐々に食事が増し、伝い歩きができるまで回復した。歩けるようになると、夜遅くに歩くこととするOさんの姿が何度も目撃された。深夜の活動は徘徊(はいかい)と判断されがちだが、武田さんは「なぜ夜間に歩こうとするか」が気になり、本人の思いを探った。すると、ほかの人たちの邪魔になるため、あえて

夜に歩く練習をしようとしたことが分かった。「その人らしさ」を見落とさず、一人の人間として捉えて関わることが基本。グループホームは個別ケアの集合体なのです」と武田さんは話す。昼間に歩行練習ができることをOさんに伝えると、夜間の活動は見られなくなった。

本人にとっての最善を探る多職種連携

「家に帰りたい」。病院勤務時代、患者さんの切実な願いを身近で聞き、その実現に奮闘してきた武田さん。認知症の人の思いを実現しようとする姿勢はグループホームで勤務する今も変わらない。認知症には、アルツハイマー型やレビー小体型などさまざまなタイプがあり、それぞれでBPSD(行動・心理症状)やその対応が異なる。オープン当初、近くに専門医はおらず、「手探りだった」と武田さんは振り返る。しかし、持ち前のフットワークを生かして情報収集に努めた。札幌市には認知症疾患医療センター(センター)が未設置だが、隣接する江別市のセンターに相談するなど対応してきた。

本人にとってのベストは何か、を念頭に置いたケアを提供する福寿荘。その実現には多職種との連携が欠かせない。連携の際には、職種・立場で壁を作らないよう心掛けている。「認知症の人にとっては、私たちは『支援してくれる人』の1人です。そこに所属や職種は関係ありません。本人を中心に、何が最善かを一丸となつて探ることが多職種連携ではないでしょうか」とチームケアの在り方を語る。

その人らしく過ごせる地域を目指して

福寿荘Ⅱオープン後、運営も安定してきたころ「もし自分が今、認知症になったら」と考え



Oさんに体の具合を尋ねる武田さん(右)

た武田さん。50代の認知症の人でも利用できる資源が周囲にあまりないことに気付いた。高齢者以外の人が地域で生活していく上での1つの拠点となればとの思いで、2006年からは若年性認知症の人の受け入れも開始。高齢者と比べて活動量も多いため、職員配置を手厚くして対応している。

地域に開かれたグループホームを目指す福寿荘では、数年前から施設の一部を解放してデイサービスに通う人たちの介護教室である「認知症サロン」や、認知症カフェ、小学生を対象にした「子ども食堂」を実施している。いざというときに「そういえば!」と思い出してもらえよう、地域と顔の見える関係づくりを進めている。

今後はこれらを組み合わせた取り組みを行う構想があるという。午前中に簡単な認知症に関する介護教室を行い、昼には子ども食堂を、午後にはカフェを利用してもらい、地域住民同士、世代を超えて交流を深めてもらう企画だ。地域のさまざまなニーズに応える武田さん。認知症の人でも、その人らしく過ごせる地域を目指す取り組みは今日も続く。

概要 職員構成: 看護職(常勤5)、ケアマネジャー(常勤9)、介護職(常勤31・非常勤8) / 入居者42 / 入居者平均年齢84.1歳 / 平均要介護度3.5
※事業所全体(福寿荘Ⅰ〜Ⅲ)における数値

